



征 ちやんく 滑稽演説の序

日清の戦闘愈々熟し我兵は勇敢益々大捷を博するも
 當り都下の書肆争ふて其戦記を出版せし弘文館主人も
 亦其の中間たり而して道人は數年來の知己たるを以
 て何か書て呉よとの相談ありしより即ち眞面目然た
 る交戦實記及び滑稽的ちやんく征伐の小冊子數種
 を編著して之と與ふ然るも孰れも非常の好評を得て
 主人乃ち囊中頗る大勝利帳場の弗函萬々歳を唱ふ是に
 於てか主人層一層の勇氣を出し又々何か大勝利乃物



を作ッて貰ひ度との注文あり因て今度の演説を思ひ
付て之を作れり然れども其面白さか面白くないかと
道人自らよの頓と分らき只讀者諸君の御評に任すの
み

四

滑稽演説一編成。 皆是日清大戦争。

請見豚兵無氣力。 降參遂去北京城。

明治廿八年第一月上旬祝杯乃微醉を帶て

骨皮道人識

ちやんく 滑稽演説

目録

- 豚尾國分割論
- 李鴻章を戒む
- 所替れハ支那替る
- 大小論
- 似て非あるの説
- 一寸お笑ひ草
- 長足の進歩

○諸外國の日本評

○大日本と朝鮮

○戦争の錦繪を見て感あり併せて

書工先生に注意を促す

○一致力の必要

○ちやんく唄

ちやんく 滑稽演説目録終

ちやんく 滑稽演説

骨皮道 著



○豚尾國分割論

諸君諸君も承知の通り日清開戦以來我が精銳勇戦ある軍隊の向ふ處眞個に敵なく(ヒヤ々)敵泣く(ヒヤ々)の勢ひ恰かも破竹の如く又烈火も宿あらず(ヒヤ々)已に豊島に成歡に牙山よ平壤に威海衛に黄海に其他中和貴州等の小衝突に至る迄悉くちやんく坊主を滅茶く

八
撃ちよ鷹懲して朝鮮國內よの片足だも留むる
を得せしめず(ヒヤ〜)夫より清國へ突進以來
よ在ての第一着として九連城及び鳳凰城を陷
落し(ヒヤ〜)續いて大連灣金州城を占領し(ヒ
ヤ〜)又々進んで一方の連山關岫巖及び摩天
嶺より遼陽城等を攻撃して是をも一握りよ握
り潰し(ヒヤ〜)猶ほ一方の彼が咽喉ども命の
親ども頼んで居た旅順口をも只一撃よ占領し
たからよの(ヒヤ〜)扱て是から益々突進突撃
して奉天府順天府の云ふよ及ばず南京北京を

も掴み潰すの實に瞬きする中であらうと思ひ
ます(ヒヤ〜)ナント諸君日本の強いでい
いませんか(ヒヤ〜)ナント諸君日本の腕前の
素晴らしいでい(ヒヤ〜)ナント諸君
君大和魂の致す處と云ふもの大したもの
い(ヒヤ〜)ナント諸君
嬉し事い(ヒヤ〜)ナント諸君
て斯も日本軍隊の世界よ比類あきまで強
して此連戦連勝を得たるが爲よ、我々國民よ至
るまでが海外諸外國人よ對しても大ぬよ肩身

の廣きを覺ゆるやうなつたどのナント諸君
 有難い事でのり坐いませんか(ヒヤ)ソコで
 此の我々日本臣民が并舞雀躍手の舞ひ足の踏
 みどころを知ざらるまで喜悅斜あらざるよ
 引替へ彼のちやん坊主の國は在ての其親
 玉の李鴻章を始めとして孰れも皆亦周章狼狽
 その爲處を知らずして只々ウロウマゴノソ
 くメソソく恰も盲目の地震も出逢たるが如く
 恰かも煙の火事も於るが如くイヤハヤ何とも
 彼とも云やうも警方もあいな大騒大乱痴機だと

云ふ事で傍壁いますすが是やア成る程さうさく
 ての成りますすまい(ヒヤ)大ヒヤだ扱てその
 大騒ぎ大乱痴機の溜ッ返しと付ての流石の傲
 慢無禮不埒千万あるちやん坊主めも今度
 と云ふ今度こそ余ほと懲々したと見へて(ヒ
 ヤ)此節の諸方へ豚尾頭をヒヨコくと下
 てどうぞ日本へ謝罪て下さい、どうぞ日本へ仲
 裁をして下さいとい云つて頻り頼み込で居る
 さうで傍坐います(ヒヤ)宜氣味だ處で若し
 も列國が其依頼も應じて仲裁を申し込だ曉も

ハ、ツマリ四百餘州の半分又ハ三分の一を日本へ明渡して夫ハ軍費何億何千何百何十億万圓を賠償すると云ふ事もあるハ必定で涉坐いませうが、扱て其時ハ如何したもので涉坐いませうか、勿論これハ我々が嘴しを容る處てハありませんけれど、ヒヤ、ノウ、若しも道人一個の私見を以て之を云へバ、ナニ土地を半分だの三分の一だのと其様ホ面倒臭い手數の掛る事をしさいで、寧ろその事四百餘州をツツリ丸取ました方が宜からうと思ひますが諸

君のお考への如何で涉坐います(ヒヤ、大賛成)

○李鴻章を戒む

コラヤイちゃん、坊主の坊主頭へナチヨコ野郎の李鴻章よ、汝ぢ人間並の耳があるからハ請ふ聞よ、汝ぢ人間並の目玉があるからハ請ふ見よ(ヒヤ、謹聴)汝ぢちゃん、坊主の坊主頭のへナチヨコ野郎よ、汝ぢハ一体全体抑々元來、寝惚たのか、戸惑ひしたのか、血迷ふたのか、逆上したのか、夫ども又書録したのか、氣が狂

十四
ツたのか(ヒヤ)汝ぢの是までの世間の評判
で同じぢやん仲間の強慾張り恥知らず
の中でも少しの毛並が違つて居るとか鳥無き
郷の蝙蝠だとか云はれて何よか斯よかお茶を
濁して居た男で(ヒヤ)然るよ今度
と云ふ今度こそ其の實も早や話しまも繪も書
けさい前代未曾有開關以來何度の國をどう尋
ねても比類のさい大恥かき大味噌を附たで
さいか(ヒヤ)然だから道人が汝ぢの寢惚た
のか戸惑ひしたのか血迷ふたのか逆上したの

十五
か夫ども又聳碌したのか気が狂つたかど云ふ
のだ(ヒヤ)けれども只さう云つたばかりで
目下の方角を失ひ途方又暮れてへドマド
て居る最中よの迎も何の事やら理解が分るま
いからヨク嚙碎いて云つて聞かせやう汝ぢ
もヨク氣を落つけて之を聴け(謹聽)ヒヤ
()扱て汝が前代未曾有開關以來何處の國を
どう尋ねても比類のさい大恥かき大味噌を附
たと云ふ其大略の先づ第一猫婆で飴屋の本家
を嘗め込もうとして首尾よく遣り損つたで

あいか(ヒヤ) 夫から大膽も無鉄砲も大
日本帝國の勇猛武烈あるも頓着せず妄りも瘦
腕を突つけ張て戦端を開かうと云ふ不量見を起
したのが抑々大間違ひの骨頂でいか(ヒヤ
)而して其大間違ひより生じたる恥さらし
の結果、即ち豊島海まで軍艦及びちやんく
坊主一千有餘名を繰出して日本艦隊も手向ふ
たるが故も一隻の軍艦操江号の手もあく捕獲
せられ跡の濟遠廣乙の二隻のメチャクチャも打
毀され剩さへ運兵船高陞号の打沈められて乗

組のちやんく 坊主一千有餘名の残らず土左
衛門とあつたでいか(ヒヤ) 其の後成歡
牙山も數万のちやんく 坊主を集めて一生懸
命も固守て居た甲斐もあく、脆くも只一戦も大
敗して大將の葉志超聶士成までが軍旗も鉄砲
も投げ出してスマコヲヨイヤサと這ふくの
体で逃げて仕舞たでいか(ヒヤ) 夫でもま
だ性懲りもあく前も數倍するちやんく 坊主を
平壤も繰出し、例の通り逃腰を構させて居た處
又いへチャクチャも大負とあつて残らず袋叩

さの鼠同様ビシヤンコとあつたでいか(ヒ
 ヤ)是は引續いて黄海の海戦で己が國の
 大黒柱と恃んで居た北洋艦隊の甲鉄艦四隻を
 撃沈せられ、猶ほ三隻の軍艦を焼棄するやうな不
 間をし出かしたでいか(ヒヤ)夫から又
 己が清國へ進入せられて鴨綠江附近で打ッ拂
 はれ、九連城から鳳凰城を攻取られ、夫から花園
 口、金州、大連灣、旅順口、岫巖、摩天嶺、遼陽城、奉天府
 まで占領せられ、今の早や薬罐のうで、鋸と一般
 手も足も出ざるのみならず、銃砲軍旗金銀米穀

をも夥多しく分捕られちやんくの生捕の万
 を以て算ふるに至る等、イヤハヤ埒口のあい始
 末よ立至つたでいか(ヒヤ)然るも汝ぢ
 へナチヨコ野郎の李鴻章のちやん坊主の
 坊主頭で居ながら、猶も強情を張て頭を下やう
 とせせず、徒ら又外國新聞おとへ鼻薬を贈ッて
 連敗を連勝の如く書立て貫ひ、只膏薬張りをし
 て一時遁れ、各國を瞞着んとするも、實際は於
 て陸兵の已も七八分通りまで撃殺され(ヒヤ)於
 軍艦の荒方撃沈められ(ヒヤ)此から先き

うして日本の強兵よ向ふと思ふ、よもや後悔して日頃の傲慢心も何れへか逐電したであらう(ヒヤ)夫とも若しまだ後悔せず傲慢心の幾分を存して居るあらば、夫こそ馬鹿か阿房か無神経か狂人かの範圍内よ入るべき男で、今まで隊尾仲間でも毛並が違つて居る鳥無き郷の蝙蝠だとの評判であつたの、さう云つて居た者が餘ほと直宜く買ひ被つて居たのである(ヒヤ)汝ち坊主頭のヘナチヨコ野郎の李鴻章よ、汝ちの先祖もさう云つた事があるぞ、過つて

改むるは憚かる勿れと汝ち少しく本氣よ立戻つて此遺言を翫味して見ろ、この糞ッ垂れの老碌爺めざまア見やがれ、アーバヨ(拍子大喝采)

○所替れバ支那替る

諸君、所替れバ品替ると云ふ事、何時の時代も何の何兵衛の云つた事か知りませんが、何よ就ても能く引合よ出る語で傍座います、道人も今この演題を饒舌るよ當つて亦これを引合よ出さねバあらぬ事よ成りました(謹聴)如何様所が替れバ自然品も替り稱へも違ふと云ふ

免かるべからざる習慣でして世の中又其類の
 澤山侈座います、決して浪花の声を伊勢で濱荻
 と云ひ東京の阿父さん阿母さんを奥州でだ
 アがアま、と云ふ計りで、侈座いません(ヒヤ々
 を)即ち東京で云へば道樂者を大坂での極道と
 云ひ、東京である。と云ふ事を肥後の地方で、あ
 いと云ふと、一々之を數へて居た日又の中々
 十日や二十日掛つても、埒の明かい程あるので
 侈座いませう、又日々普通の禮儀作法に至つて
 も、東京の人若し來客の時手拭でも被つて居

ると、何の扱置き先づ手拭を取て挨拶するを例
 と致しますが、或在方あへ参りますと、大い
 之又反して少し自分より身分の上の人の家へ
 行くよ、の必らず手拭を被つて出掛ると云ふ妙
 赤風俗の處も侈座います(ヒヤ々)同じ日本の
 中でさへ、言語と云ひ、物の稱へ方と云ひ、禮法と
 云ひ、其國々又依て千差万別で侈座いますから
 死して海外幾千里を隔て赤い髭や碧い眼玉を
 して居る人々と日本人との間よ於て、大い又異
 ある處のあるのは、是の當然の事での、侈座いま

すけれども、今試み又其大反對の箇條の二三を
 擧て見ませうからば、日本での頭を下てお辭儀
 をするのを禮とすれど、西洋での頭を擧て手を
 握るを禮とし、日本の婦人の常又男子と交際せ
 ず、又成べく餘計なお饒舌りをせぬを宜しとす
 れど、西洋の婦人の男女又拘らず成たけ多勢の
 人又交際し、又成たけ口輕又ベチャクチャとお
 饒舌りするを宜しとし、日本の書物の右から披
 いて縦又續めど西洋の書物の左から披いて横
 又續むおど、其反對の事の随分澤山又涉坐いま

す(ヒヤ)併しおがら是等の反對の即ち反對
 又の相違おきも詰る處のマアどうでも宜と云
 ふ位お事で涉坐います、然る又如何又所替れ
 どて丸ツ切り事の大反對として、國の恥辱とな
 るをも知らず世界の人の笑ひ草とあるをも顧
 みずして、ホンを極込で居るの、凡そ世界の
 の廣しど雖も彼のちやん坊主即ち支那の
 國の外無からうと思ひます(ヒヤ)何とあ
 れば世界各國いづれの國の戦争又ても敵を打
 破りたるを勝利と致しますすけれども、支那の國

での決してさうで無く、敵も追まくられ敵も打
 敗られ滅茶くも敗北したのを大勝利と稱へ
 (ヒヤく) 又た何れの國の戦争でも敵軍の中へ
 突進突撃して一步も退かず、而して功名手柄を
 顯すを千載不朽の名譽とし又豪傑ども稱し忠
 臣ども致します、支那の國での決してさうで
 なく、大將を始め兵卒に至るまで成たけ危き
 近寄ぬやう、命を全ふして一生懸命も逃負
 せた者を豪傑とか忠臣とか云つて、之も褒美を
 遣り或ひの勳章等を與へます(ヒヤく) ナント

諸君此位大間達ひの法則が何處の國も涉坐い
 ませうか、恐らく天地開闢以來支那の國より
 外も涉坐いますまい(ヒヤく) 已も今度の日
 清の戦争も就ても彼の提督葉志超あどの軍法
 も随分奇々妙々、あ事が涉坐います(ヒヤく)
 謹聽く、彼れ葉提督がちやん坊主を率ぬ
 て牙山へ繰出したときに、豫て女房から餘り日
 本兵も近附あいやう、若し戦争をするやうあ
 ら成たけ兵隊を先へ出し、自分も遠くへ
 離れて鉄砲玉の飛で來あい處も隠れて居るが

宜しいと怨々説諭された事もあり(ヒヤ)自分も能く考へて見ると成ほど鉄砲玉を食ッての大切を一命を棒振かも知れん、定九郎の二の舞の餘り下されぬと思ふ處から、先づ劍呑み成歡の方への聶士成と云ふ下役を遣て、自分牙山の幕營中又朝鮮の地獄女を呼寄て頻り又鼻の下を長くして居ました(ヒヤ)スルと果せる哉成歡驛の日本兵の爲め又撃てく撃敗られ其都度下役の聶士成から敗軍く又敗軍との通知又葉提督の大い又意(ヒヤ)

ッラこそ連勝だ又々大勝利だと獨りで勇んで居たが、今度の愈々成歡の堡壘も日軍の爲め又陥いれられたとの敗報が来たので葉提督の益々手を拍て打喜び……敗報が来て喜ぶとい餘ほと不思議でせう(ヒヤ)夫からどうするかと思ふと忽ち坐を立て行き成り其處又有合ふ朝鮮地獄の女服又姿を改めつゝ俄又我が守兵を呼集めて号令を掛た、皆々喜べよ我軍大勝利あり諸兵我又續いて洪州まで繰戻せ(ヒヤ)是も不思議な号令です、大勝利だから此勢

ひよ乗じて進軍せよと云ふのち分つて居るが、我軍が大勝利だから跡の方の洪州まで繰戻の軍法又抄坐いませうか(ヒヤ)夫から洪州まで命からく逃げて見たが、日本兵の夫と聞より跡を追掛て来たので、是の大變と又々平壤まで繰戻しの号令を下し、一生懸命夜を日又繼で逃げたので漸く一命だけの助かりました(ヒヤ)然る處支那政府でも此軍法を聞き、流石の提督だけあつて三十六計の外の新工夫を考

へ、女の姿又化變つて敵の面を見せず一目散と徒既で駈出すのみならず、金さへ出せハイッラでも出来る軍旗銃砲あど目もくれず、只々命大事と空腹を抱へて平壤まで逃負せた處の迎も並大抵者又出来る業でない、如何も當世の英雄だ忠臣だと云ふので、取敢ず褒賞として銀二十万兩を與へました(ヒヤ)戦争も出て逃げた者又褒美を與へるとの抑々ちやん坊主の外、他又其類例を見た事も聞かぬ事も多座いませぬ(ヒヤ)殊又葉志超と云ふ男

の已^まも出陣^{しゅつじん}も就^つて其^{その}軍費^{ぐんひ}三十万^{さんじゅうばん}兩^{りょう}を政府^{せいふ}から
 請取^{うけと}りや否^{いな}や、素早^{すば}くも其^{その}内^{うち}二十万^{さんじゅうばん}兩^{りょう}だけ棒先^{ぼうさき}を
 刻^はて居^ゐますから、此^{この}二十万^{さんじゅうばん}兩^{りょう}の賞金^{しょうきん}を合^あせると
 都合^{ごうご}四十万^{しじゅうばん}兩^{りょう}の商法^{しょうぽう}を致^{いた}しました(ヒヤ〜)と
 云^いふやうあり様^{さま}で伊座^{いざ}いますから、是^{これ}でどうし
 て日^に本の勇兵^{ゆうへい}も勝^かてませう、連敗^{れんぱい}の極^{きよく}の途^つも帝^{てい}
 都^との北^ぺ京^{きん}まで日^に本の占領^{せんりやう}地^ちもあるよ、立^{たち}至^{いた}りし
 る決^{けつ}して偶然^{ぐぜん}で伊座^{いざ}いますまい(ヒヤ〜)夫^{これ}
 から轟士^{こうし}成^{せい}も葉提督^{はていとく}が盲^{くら}く逃負^{にげお}せて褒美^{ほうび}を貰^{もら}
 ったと聞^きき、是^{これ}りや斯^かして居^ゐられぬ處^{ところ}と、急^{きう}よ

兵^{へい}を曳^ひて逃歸^{にげかへ}ったので是^{これ}も幾何^{いくわ}かの賞金^{しょうきん}を貰^{もら}
 ひ、猶^{なほ}は兵隊^{へいたい}も其^{その}時^{とき}一^{いっ}所^{しよ}も逃出^{にげだ}した者^{もの}の夫^{それ}々^{ごと}相^あ
 當^{たう}の賞金^{しょうきん}を貰^{もら}ったさうで伊座^{いざ}います(ヒヤ〜)
 其^{その}後^{あと}宋慶^{そうけい}と云^いふ男^{おとこ}が九連城^{くせんじやう}を守^{まも}って居^ゐたとき
 も、葉提督^{はていとく}の軍略^{ぐんりやく}を用^{もち}めて盲^{くら}く逃負^{にげお}せたと云^い
 ふので是^{これ}も矢張^{やじやう}り莫大^{ばくたい}の賞金^{しょうきん}を貰^{もら}ひました(ヒ
 ヤ〜)ナント諸君^{しよくん}よ如何^{いか}も所替^{ところか}れバ品替^{しんか}ると
 の云^いへ、是^{これ}はど馬鹿^{ばか}〜しい大間違^{おほまちが}ひの替^かり方^{かた}
 の伊座^{いざ}いますまい(ヒヤ〜)餘^{あま}り其^{その}トツチンカ
 ンの甚^{はな}だしいが爲^ためよ、斯^{かく}の長^{なが}たらしきお饒舌^{じょうぜつ}

をして支那の國の迎も長持の赤い事を侈吹聴致します(拍手大喝采)

○大小論

大小論と云ふと何だか柱曆の講釋でも爲るやうで侈坐いすが、道人が茲も此論題を擧ぎ出したの、大いよ思ふ所あつて、侈坐います(謹聴)昔し彼の孟子が齊の宣王も見へて戦争の話をした時よ、小の固より以て大も敵すべからず、寡の固より以て衆も敵すべからずとの小理屈も宣王も其能辨も面食ツたと見へ一も

二も赤やナール程と感服して仕無つたので後世も至ツても矢張り煙も巻れて孟子の説も賛成する者多く、只何が赤し理も非も云はず、小の大小敵する事の出来赤いもの、寡の衆も勝つ事の出来赤いもの、取極め、殆んど是を以て千古動かすべからざるの金言として居るの有様で侈坐います(ヒヤ)けれども道人の大いよ此説も反對で、決して其様赤理屈の無からうと思ふナゼかと云ツて、侈覽じろ、若しも小を以て大も敵する事が出来赤いとして見た日、よの何が故

三六
よ淺草の觀世音の仁王を門番に使つて居るで
渉坐いませう(ヒヤ)若しも寡を一以て衆よ敵
する事が出来あいとしたりあらば、何が故よ一本
の杵を以て幾億万粒の米を精げるので渉坐い
ませう(ヒヤ)其他山柈の小粒でもヒリ、と
辛くして大いある絲瓜を壓倒し、一粒の金米糖
の十枚の輕燒より甘き等、實際よ、於て其例の澤
山渉坐いませう(ヒヤ)已よ今回の日清戦争の
如きも、支那の四百餘州と誇つて居るだけあつ
て日本よ比ぶれば随分廣い、又人間の頭數よ至

三十七
つても自ら四億万と稱して居るだけあつて、日
本の人員よ比ぶれば殆んど十倍あるよも拘ら
ず、其十分一よも及ばぬ日本の爲よ滅茶の
大負け大失敗りを仕出かし、今の早や四百餘州
も四億万人も残らず日本の支配を受ねば成ら
ぬやうさ實よ泣ても吠ても追付あいな事よ立至
つたで、後坐いませうか(ヒヤ)大ヒヤだ是
の机の上の空論でも無ければ畑の水練でもあ
い、現在世界万国よ於て何人も証認する處の實
例よあれ、彼の孟子が小の固より以て大よ敵す

べからず、寡の固より以て衆を敵すべからずと云つたのを、金言だの格言だのと云ふ事の決して出来ませぬ(ヒヤ)尤も悉く書を信ずれば書なきも如すと云ふ事もありません元來敵すべからずと云ふ此べからずと云ふ言葉を解釋して見ると、どうしても何様も事をしても敵する事の出来ぬ、即ち小さい物の事をしても大きい物の勝ぬ、寡の勝ぬ物にどう事をしたからとて衆いものみの勝事の出來ぬいぞと飽までも斷言した言葉で、能はずと云ふ

のどの大いよ其意味が違ひます(ヒヤ)故も道人の此孟子の語を打破つて、縦ひ小ありと雖も日本の支那も於るが如く、淺草の觀世音の仁王も於るが如く、又山榊と絲瓜も於るが如く、金米糖と輕焼も於るが如く、此方も大なる物を壓倒するだけの力さへあれば、必らずしも其大と衆とを恐るゝも足らず、又其國の如何も大なるも其頭數の如何も衆くとも、只大と云ひ衆と云ふ看板ばかりで所謂迂奴の大木であつた日よ、彼の絲瓜と輕焼の嵩張て居ると同じ事で

到底山耕と金米糖よの及ばあい事と斷言致し
ます(拍手喝采)

○似て非あるの説

諸君よ、昔し織田信長が初めて木下藤吉郎を見
ました時よ、イヤ是の妙痴奇々態を面をした男
だ貴様のいどう見ても猿としか思へない、實に能
く猿に似て居ると戯言を云ったので是より人
々の藤吉郎を縛名して猿面冠者と云ひました
(ヒヤ〜)然れども藤吉郎自らの信長の云ふ處
よ服せず、何を馬鹿事な乃公が猿に似て居る

のぢやあい猿の方が乃公に似て居るのだと云
って居たさうで、座います(ヒヤ〜)成程物の
云ひやう一ツでどうでも成るもので、座いま
すから、猿が藤吉郎に似て居たのやら藤吉郎が
猿に似て居たのやら何方がどうやら分りませ
んけれども、世の中よ、斯様な類が澤山ありま
す、豈に啻に藤吉郎と猿のみで、座いません
(ヒヤ〜)例へば西洋人の髭の能く蜀黍の毛に
似たる、女學生の束髪そくぱうの能く牛の糞くそに似たる、兵
子こ帯おびの能く犢鼻たんにし褌ふんどしに似たる、ピールの能く馬の

小便せうべんも似たる、其他そなたオボンも似た股引ももひきもあれハ
 羽織はおりも似た半纏はんまんともあり、洋犬やうけんも似た狎なもあれハ
 牛肉ぎゅうにくも似た馬肉ばにくもあり、或あるひハ敷物しきものも似た肩掛かたかけ
 もあれハ牛乳ぎゅうにちも似た白水しろみづもある等らう、其種類そのしゆるいハ實じつ
 一枚まいまい擧あげ違いわらずで伊座いざいます、尤もつとも是等これらの類るる
 ハ何程なんぢやうあつても只能ただよく似に寄より居ゐると云ふだけ
 の事ことで、敢あて他たハ害がを及およぼすと云ふでも無なけれ
 ハ別べつハ難なんの艱かんのと云ふ程ほどの事こともあし詰つりどら
 ても宜よろいと云ふ話しで伊座いざいますすけれど、其能そのよ
 く似にて居ゐる物ものの中うちでも似にて非ひある物ものも至いたつて

ハ、決してどらでも宜よろとして打うち棄すて置く譯わけもハ
 参まゐりません(ヒヤク)今いまその打うち棄すて置おけあいと
 云いふ物ものの大略たいりやくを舉あげて見みませうからハ、即すなはち自由じゆう
 又また似た我儘わがまま、活潑かつぱくも似た乱暴らんぱう、お心好こころよしも似た馬鹿ばか
 娼妓しょうぎも似た私窩しご子こ待合まちあも似た地獄ぢごく宿やど、才子さいしも似
 た狡猾かうわつ、用心よじんも似た臆病おくびやう、紳士しんしも似た山師やまし、附籍ふせきも
 似た居ゐ、柔和にやわも似た痴身ひんしん、耐忍たいにんも似た意氣いき地ちを
 し、注意ちういも似た小言せうご、保護ほごも似た幼害おつが、壯士さうしも似た
 コロッキ、穩當えんたうも似たホイヤリ、經濟けいぎ家かも似た客きやく
 畜坊ちくぼう、氣樂きらくも似た怠惰たいだ者もの、誘導いどうも似た煽動せんどう、尊敬そんけいも

似た 誼諛 大膽 又似た 無鉄砲 保養 又似た 道樂 進
 物 又似た 賄賂 能辨 家 又似た お饒舌 淡泊 又似た
 薄情 親切 又似た お爲 轉し 回状 又似た 檄文 直言
 に似た 憎まれ口 斷念 又似た 據ろ ちし 金 又似
 た アルミ 銀 又似た ニツケル 翫弄物 又似た 花骨
 牌 其外 まだ ドツサリ あり ます けれ ども 一々 勘
 定する のも 面倒 臭い から 先づ 此位 又して 置き
 ませう (ヒヤ) ソコ 是等 の 能く 似て 非ある
 物の、さう ても 宜として 打棄て り 置ぬ どの 云ふ
 もの、併し 是と ても とう ても 宜として 打棄て

置 打棄て 置ても 宜い ので 傍坐 います が、此 外
 又 とう しても 打棄て 置き さい 川 いて 非ある 物が
 傍坐 います、夫 何 である か といふ 又 即ち 大日
 本 帝國 の 大名 譽 又 關する 處 の、和 降 參 と 云
 ふ 一 事 で 傍坐 います (ヒヤ) 諸君 試
 み 又 思ひ 給へ、媾 和 と 降 參 と の 能く 似て 居 ます
 けれ ども 其 意味 の 雲 泥 の 違ひ で 傍坐 いた せう
 (ヒヤ) 今 これ を 分り 易く 云 っ て 見れ ば 媾 和
 と 云ふ の 俗 又 云ふ 仲 直り で、例 へ ば 權 兵衛 と
 六郎 兵衛 と が 喧嘩 を する、其 處 へ 八 兵衛 が 仲 裁

ん這入て、どうでせう權兵衛さんお互ひもア
 虫の居處が悪かつたが爲、難の難のど一時顔
 を赤らめ合たやうなもの、元を糺して見りや
 ア根も葉も無い事だから、お互ひも爰の處の言
 はず語らず万事何事も私しの、云ふのと同
 サツパリと水も流して貰ひ度と云ふのと
 事、又降参と云ふの、大いよ之よ反して、モシ權
 兵衛さん私しが是々の事をしたの、重々私し
 が悪かつた、定めしお腹も立たせうけれど、以後
 の屹度心を入れ替へて、何事もお前さんの被仰る

り又致しませうから、どうぞ此度の處の平
 謝罪を願ひますと、疊へヒツマリ頭を摩り付
 り謝罪する、扱て斯あると權兵衛の方が權利者で
 ろるから、イヤ夫れほどお前さんも後悔して謝
 罪さざるから私しだつて、サウいつまでも頑固
 事も云はあい、此後こんな都合の屹度しあ
 いと云ふ事、強ち勘辨をしまいと云ふでも
 無いが併し、口約束だけで、甚だ不安心と思は
 れるから、夫だけの事を一寸一筆書て置いて貰ひ
 度と云ふので、即ち証之事とか謝罪状とか云

ふ 標題を置き

一 私儀一時の量見違ひより貴殿又對し乱
一 禁も藥罐天窓を撲り付んとして却て捻伏
られぬ段酒興の上との申しあがら何共申譯
無之今更どうしたら宜かんべると殆んど後
恠致しぬ夫又付貴殿の熱火の如く侈立腹す
んでの事其筋へ撮み出されて赤いお仕着を
頂戴致すべきの處特がの侈寛典を以て此度
又限り侈勘辨被成下お蔭を以て命拾ひを致
しぬ段斯く申す本人の勿論親兄弟親戚朋友

より見す知らずの赤の他人に至るまで如何
計か有難き仕合せも存じ奉りぬ然る上今
後貴殿又對し決して不埒不屈無禮失敬不
所存不量見不都合不始末等の振舞の毛頭致
す間敷若し又咽元過て熱さを忘るゝ様の事
有之ぬ節の如何様の侈處分も相成ぬ共只々
へイくハイく 侈無理侈尤も侈意任せ其
期も及んでグウどもスウども未練ケ間敷事
の決して申さずぬ依て後証の爲め謝罪狀一
札如件

と云ふやうな屁多あやまりな謝罪のが即ち降
 参で伊座います(ヒヤ)ッコで今度の大日本
 帝國とちやんく坊主の豚尾國とか戦争をし
 て、ちやんく坊主めが愈々閉口したと就て
 諸外國へ泣付て日本へ媾和を申し込とか云ふ
 風説あれど媾和と降参との區別の即ち前云
 ふ通りの大違ひであるからして已まぢやんく
 坊主めが屁茶苦茶な戦争な負け是までの高慢
 も無禮も實も不心得であつた申譯のさい事を
 したと改心したから、四百餘州をさらけ出し

四億万のちやんく坊主が残らず頭を下て降
 参するのが至當である(ヒヤ)ッコ媾和
 だの和睦だのと其様お馬鹿くしい申し込を
 された義理でもあし、好んば彼様お野蠻の理も
 非も分らさい奴だから面の皮厚くそんな事を
 云ッて來たからとて大日本帝國も於てウンさ
 うかど其申込みを受る筈の無からうと思ひま
 す(ヒヤ)ッコ尤も是等の事、今更道人が物知顔
 をしてお饒舌をするまでの事、おかけれど、似て
 非ある物も付て一寸思ひ出しましたから聊か

構和と降参との區別をお話し致したのみの事
で滂坐います(拍手大喝采)

○一寸お笑ひ草

諸君、凡そ何事も限らず取合せと彩色と云ふ物
が無ければ成りません、譬へば小六ヶ敷理屈は
かりを云つて世の中が渡れるものでもあし、と
云つて豆藏が熱く浮されたやうな只出鱈目を
ペラ／＼饒舌つて居るばかりでも用は足りず
或ひは鯛の刺身が旨いと云つても朝から晩ま
で毎日／＼鯛の刺身ばかりを喰つて居られるも

のでもあし、如何な漬物も茶漬が澁泊して居る
と云つても年箇年中さうなベツと茶漬ばかり
掻込で居る譯も行かないから、其處で取合せと
云ふものが必要もあつて来て、理屈を云ふべき
時よの理屈も云ひ、駄洒落の入用も時よの駄洒
落も饒舌り、或ひは鯛の刺身も喰ひ、或ひは古澤
庵も噛ると云ふやうな、其時と場合とより種
々な變化して初めて人並の世渡りが出来るの
で滂坐います(ヒヤ／＼)故に道人の此演説も只
四角張たやうな五角張たやうな妙妙小理屈は

かりを並べて居ての定めし諸君も大欠伸の留
 度が無からうと存じますから、此處又聊か其取
 合せの爲め落し話しをお聴き達せやうと思ひ
 ます(謹聴く)イヤ謹聴を願ふほどの代物で
 さい、素より道人の落語家で、傍坐らぬから落
 し話しと云つても別な際立て面白くも可笑く
 も何ともさい、只ほんの少しばかり毛並が違つ
 て居ると云ふまでの事で傍坐いますから、其お
 積りでお聞取を願ひます(ヒヤく)謹聴く)ッ
 コで先づ最初が日本の男子のみあらず、婦女子

までがちやんく退治を愉快とし、殊もお三と
 んが南京の滅亡する前兆を示したと云ふお話
 し

ガラくくドシンパター「アレ鍋が又何
 かを毀したよ、ほんとよ奉公人は困るもの
 アありやアしさい……鍋や此處へお出で、マ
 アサ一寸お出と云へ……其様さ毀れた
 物を繼で見つたッ仕方が無いぢやあいか
 :コレ宜くお聞よ、縦ひ小皿一枚でも徳利一
 本でも決して只呉る者のさいよ、みんな何品

一ツとして大切なお錢の出ないもの無い
 のだからお前のやうな再々毎日ノセツ
 よ打ち毀わされちやア困るぢやないか、イッ
 ラ山出したッてマア物も少しの積ッて見た
 が宜い「まことよハア申し譯ノウありましね
 へ、此後はハア氣を附ますべエから……」ナニ
 さう謝罪あら今日の處の勘辨もしやうけれ
 ど、此後のナト氣を附て呉ないと困るよ……
 然して今の何を毀したのだへハア彼の且
 那樣が見ても癩又障ると云はしツた南京鉢

で傍坐りますだア、彼の南京かへアレお
 ら幾個毀しても宜い（ヒヤ〜）
 扱て其次は是も矢張りちやん〜一件又就て
 縋子の帯までが三文の直打も無くあつたと云
 ふお話し即ち是は取ッべられたからで傍坐い
 ませう（ヒヤ〜）

コウ熊や人の氣合テいものア奇手列あもん
 ぢやアねへか「あんだ突然よマアよ聞きねへ
 ちやん〜征伐の戦争がおツ初まつてから
 テいものア、滅法界よ日本が強いもんかたら

夫よつれて支那出來の物ア何でも直打が無
くあつたぜ「それやア當然よ」マア聞きねへテ
「事よ、昨夜も少しばかりし〇が入用あんで例
の七ツ屋へ駈附たと思ひねへ」極ツてやアが
ら「マア聞きねへよ、スルとお前南京縹子の帯
あんだア三文の直打もねへテ」んでカラキ
シ見向もしやアがらねへんだ「あるはと爾り
やアさうだらう、縹子と来た日よやア日本の
敵だものヲ誰がそんな物よ錢を貸すものか
「然ッてお前南京の日本敵よ遠へねへは縹

子の帯あんずよ何の罪も科も無へぢやねへ
か「手前も餘ッばと分らねへ東變僕だ、其位へ
あ事ア三ツ子でも知て居るぢやアねへか」ナ
せ「まだ分らねへのか、ソラ彼の軍歌ヲ
ものを聞て見ろ縹子めや」みあ縹子めと
云はア「ヒヤ」

夫から今度の彼のちやん「坊主がどうして
も日本よの勝事の出來あいな筈だ」と云ふ、其所謂
因縁のお話し
旦那へ彼のちやん「坊主めが何様あよ豚

尾頭を振廻しやアがつても、瘦腕を突ツ張ら
かしゃアがつても、迎も日本の爪の垢も追
付あい筈ですぬ夫れやアさうサちやん
坊主の蛆虫同様の奴等ばかり、此方の文明國
のチヤキく、だもの「イエ夫ばかりで無く、能
く考へて見ると延喜が悪いぢやアありませ
んか、第一支那、清國、四百餘州、四億万人、上海、盛
京省、なんふと皆赤頭よシの字が附て居るし、
か負ふ北京の北の字の敗北の北の字で、ニケ
ルと讀むぢやアありませんか「ナールほごさ

う云ツて見りやア夫もシ北尤もだ(ヒヤく)
夫から今度の芝居でもちやんく坊主を打の
めささいと見物人が承知しさいと云ふお話し
田舎の人が東京見物又出て来て或親類の家
へ泊り込み、毎日諸處方々を見歩き、今日何
座かの芝居を一ツ見物しやうと云ふので何
座が宜からうかと主人又相談すると、主人の
獅ッ鼻をおやかして 主人「この節にお前さ
んも知ての通り、日本とちやんく 國どの戦
争も就て、ソット人氣が活潑て居るから、縦ひ

保養も見る芝居もしても是非日本の大將が
 出て来て例のちやん坊主を片っ端から
 叩き切て仕舞うと云ふ活歴で無ければ見物
 人が承知しあいやう有様だから先づ川上
 座が第一番又大入を取て夫から本郷の春木
 座深川の新盛座其次又蓋を明たのが歌舞伎
 座又明治座イヤ何と云つても此二座の右も
 出るもの無からう第一俳優の宜し大道具
 小道具の揃つて居るしとイヤ又劇通がツて
 饒舌ツて居ると 客お話しの中だアけんぞ

一寸のア待ツしやれお前さまア今歌舞伎座
 と明治座だアと云はしつたけが私が多やア
 ぞうしても合点が往きましねへ成程のア歌
 舞伎座ぢやア日清の戦争をしたアチウこん
 だツけ彼のとき明治座ぢやア忠臣藏をした
 んべエと一本打込れて流石の主人もギツク
 り胸よこたへたが去とて田舎漢も負るのも
 残念と思ひ 主人夫れがサ平時あら從來通
 りの脚色で見物人も喜んで居るのだが彼の
 忠臣藏の同じ忠臣藏でもズツと脚色が變ツ

て矢張り日清の戦争が取交てあつたのサ
 客「ハチね忠臣藏の中へちやん」坊主が飛
 出して來たらハア餘ッばどお茶番だんべ
 主人「それやアちやん」坊主が由良之助と
 取ッ組合たら茶番狂言だが其處の千兩役者
 の事だから皆お臺詞の中へ結び込だのサ
 客「ハチね然してどげへお事を云ひました
 ア 主人「先づ喧嘩場の處で剛直が判官の胸
 をヒタリと打て支那だ」支那ヌーメだア
 客「ナールほど 主人「夫から二人侍の處で

も勘平が支那の政府の涉愁傷と云ツた(ヒヤ
)
 扱て是でもうお芝居よしやうか、イヤ最一ッお
 負も今度の一口話しや二口話し處でいあい、辨
 慶が生て居たら屹度苦情を持込で來ると云ふ
 七口話し
 彼の九連城を陥いれたとき日本の追撃兵が
 土人又向ひ、此邊を支那兵が通りいせぬかと
 聞ど、土人の只ブル〜震へおがら遁逃存じ
 ません

と云ふから追撃兵の又二三町先へ行て聞と
敗(ハ)潰走通りました

との事よヤツト「安東」

して其跡を追掛け遂に支那兵に追附たから

モウ此先さへ「湯山」

と荒方の打止めたが中よの道を替て「鳳凰の

体で逃負せた

「支那」兵もあつたさうだが

何よしても日本兵の「大將強い

と是で先づお笑ひ草のか仕舞として、今度の又

何か活潑な演題に改めて更にお饒舌りを致し
ませう(拍手大喝采)

○長足の進歩

諸君、近頃の洒落詞と演車の後押をするに云ふ

事を申しませす(謹聴)之を一す早呑こみ又聞

て見ると如何も馬鹿氣な常談のやうでいあ

りませすが、併し能く「囁」て見ると之の中々

面白い言草で、決して何を馬鹿な事と見棄た

ものでいません(ヒヤ)諸君先づ試み

と思ひ給へ、全世界の大ありと雖も全世界の廣

しと雖も、凡そ我が帝國大日本は、長足の進歩を爲したる國の恐らく他も類を見ざる所であらうと思ひます(ヒヤ〜)一寸鼻の先も見へて居る器械的の附て見ても、先づ駕籠が變じて人力車とあり、人力車が進んで馬車とあり、馬車又に進んで蒸船、蒸車とあり、尙ほ飛脚の變じて郵便とあり、郵便に進んで電信が出来、電信も亦遅しとて遂に電話器が流行するやうな譯で、坐いまずから、此分で押して行かうものから遠からず人間も羽翼が生て飛やうと成るかも知れませ

ん(ヒヤ〜)イヤ常談の扱置て此の如く長足の進歩を以て事々物々舊來の面目を一新し、猶ほ是より駭々として無窮無限の境を歩を進め、地球全世界中も文明國の第一位を占め、實は日本は天下無双の富強國である、實は日本の無類飛切の文明國である、と尊敬せられんとするの今日も當つて、彼の迅速なる蒸車も尙ほ緩慢いかもひを爲し、自ら飛降て其後押をしやうと云ふ位の息込で無ければ、往きません(ヒヤ〜)故に今日の人氣たる万事早手廻しを

のみ是れ貴び一足飛をのみ是れ思ひ、短氣の損
 氣急での事を仕損じるおどりの姑息時代の驕言
 と爲し、そんな野の氣も格言を守つて二の足を
 踏むやうな者の一人半缺も汚座いません(ヒヤ
 く)是を以て技藝あるの人の他人の之を評判
 するを待すして早手廻し又自らこれを評判し
 學術あるの人の他人のこれを吹聴するを待す
 して一足飛又自らこれを吹聴するを待す
 で、或人々の之を自負心大天狗の流行だと悪口
 を云へど、否か決して左様か譯でのかい、皆是れ

社會の進歩と駆ツ競をするの結果と云はねバ
 ありません(ヒヤく)夫れ此の如く技術又文學
 又衛生又勸業又其他何よまれ彼よまれ社會一
 般の事々物々が俄か又長足の進歩を爲したる
 中よも、取分て陸軍海軍の著るしく進歩した有
 様と云ふもの、實又強國と誇り文明と自任し
 て居る彼の英佛獨魯その他の諸外國人も皆悉
 く吃驚仰天して舌を巻いて居る位で汚坐います
 (ヒヤく)已又今度の日清戦争又就て
 も、或ひの勝ち或ひの敗れ敵味方とも一定か

らざる變化のあるべきが古來戦争の常あるよ
 今度の戦争の如き然らず支那の大國として
 其兵員も我々數十倍の勢力あるも拘らず、又
 其軍艦の世界各國も其名を知られたる幾艘の
 甲鉄艦を所持して居るも拘らず、尙ほ軍器銃
 砲の類に至つても随分金をおします、又整へて
 居るが、最初豊島沖に滅茶負の大失敗を取ら
 るを手初めとして、其後陸も海も幾度戦つても
 つぬしか只の一度も勝たる事なし、ヒヤ、ヒヤ、
 是は反して日本の小國且つ兵員も彼より

の餘ほど少きよも拘らず、陸も海も戦へば必
 らず大勝利を得る事と極つて居るのみならず
 今の早や彼が咽喉地たる旅順口も占領し、彼が
 第二の帝都として居る奉天府も最早虫の息も
 て九分九厘まで我手中に陥つて居ると云ふ有
 様で、之を將旗も譬へて見れば日本の支那を歩
 三兵であしらひ、今や王様も雪隠の中へ押込ら
 れんとするが如く、又これを圍碁も譬へて見れ
 ば日本の支那を井目風鈴付であしらひ、今や彼
 らの生たる石もく盤面の残らず白石の有とあ

りたるが如き、實に見るも哀れな境遇に陥らし
めたる所以のもの、是れ蓋し日本の海陸軍が
長足の進歩を爲したる第一の確証で、渉座い
ませんか(ヒヤ) (ヒヤ) (ヒヤ) 加之、あらず今の
尉以下の方々の皆、泰平無事の世の中、成長せ
られたるが故、未だ實戦を試みるの時、早く即
ち今回のちやんく、征伐が初陣で渉座いませ
う、又た其指揮に従ふ處の各兵士の昔しの武士
のやうな、弓馬鎗劍を事として育つた者との違
ひ、其身の農商も生れて或ひは鋤鋤を握り或ひ

の筆算を手了したのみの事で、兵役に徴された
後、とても僅々二年か三年の訓練を受けたばかり
の人で、渉座いませう(ヒヤ) (ヒヤ) (ヒヤ) 然るも其初陣の
將校及び僅々兩三年間の訓練を受けた計りの兵
士として、只一撃の下に、彼が鉄壁を破り、只一戦
の下に、彼が金城を乗取ると云ふ偉功を奏した
の、固より他、比類の、忠勇、鉄腸の致す所
あるべしと云へ、亦砲術戦法の彼より幾層倍
をも長じつ、あるの結果として、即ち長足の進
歩を爲したるの確証で、渉座いませう(ヒヤ) (ヒヤ) (ヒヤ)

くく 尤も是に日本自ら徒らもちやん
 く 流の大法螺を吹立る譯でなく、今度の連
 戦連勝も就ては諸外國も於ても日本が長足の
 進歩を爲したるを賞歎し、日本の世界三大強國
 の一であるまで公言致しました(ヒヤク)そ
 の確証は澤山も渉坐いしますが、次は演題を改め
 て更も申しあげざる事致しませう(拍手大喝采)
 ○諸外國の日本評
 諸君、道人が前も屢々申し演たるが如く、日本
 の勇敢武烈なる事の全世界中も其比を見ざる

處で渉坐いますから、縦ひ彼れ隊尾國が我より
 十數倍の邦土を所有して居やうとも、彼れ隊尾
 漢が我より數百層の頭數を揃へて居やうとも
 一たび日章旗を振りかざして之に向ふとき、
 恰かも草木の風も靡くが如く、恰かも淡雪の日
 も解るが如く、彼の忽ち四百餘州を投出して降
 伏する事の鏡も掛て觀よりも、明らかで渉坐い
 ました(ヒヤク)然れども波濤幾千里を隔つる
 西洋諸國もて常も地圖と首ツ引を爲し所謂烟
 の水練を學んで居る人々も在て、我大日本帝

國の人民が斯まで天授の勇氣あり一致の力
 又富で居やうとの夢も心附ず只土地の大小
 と人員の多寡とを目安よ立て是での所詮と首
 を捻ッて居る處へ豚尾漢の得意の大法螺と大
 嘘で固め加ふる鼻薬あどを無暗又撒布て大
 敗を大勝の如く吹聴せしが爲め一時の外國人
 も其大法螺又吹飛ばされて新聞紙上往々よし
 て嘘の皮を羅列して居る事も侈坐いたしました
 其後だんくど化の皮が顯れて全くちやん的
 の大負の滅茶く日本は古今又比類なき大勝

利であると言ふ事が知れましたから、其事實の
 知れて後、ちやん的の鼻薬も更効なく孰れ
 の新聞紙を見ても日本の實又東洋の強國であ
 る、世界三大強國の一であると賞揚せらるゝや
 うなまで相成ました、ナント諸君侈同様又祝す
 べく喜ぶべき事での侈座いませんか（ヒヤ）
 因て道人の其外國諸新聞紙が日本を
 評したる論説又の雜報の二三を擧て、之を諸君
 又報道し併せて不朽又傳へやうと思ひます（ヒ
 ヤ）

○久しく日本に居留せし、或外國人の、英國の新
 聞紙セント、ジェームス、ガセット、又投書し日本軍隊
 を評して曰く、彼等が愛國の熱心の限りなく、而
 して人間の想像及び能ふ最も勇しき心を以
 て戦場へ行けり、彼等の絶對死を蔑視し、又今
 回の役も於て之と同一の度を以て敵の戦闘
 術を蔑視せり、尙此上も彼等を率ゐる所の士官
 の孰れも良將として生れからの武士あり、假令
 ひ今日の時代の武士も劍術を學び、詩文を弄ぶ
 ことのみを命ぜざれども、家名の重き、今も昔

しよ異ならず、扱是等の生れ正しき武士が之よ
 りも生れの劣れりと雖も、体軀岩丈として決心
 の強き兵士を率ゐて、戦場も臨み、あは目覺しき
 勇氣を顯す可きや、必せり、個々千八百七十六年
 西南の戦ひも、徴して証明し得可く、當時の困難
 の實も壯年士官の勇氣を制するも在りたり、蓋
 し日本軍隊の實力の士官兵卒の屈すべからざ
 る勇氣も在り、左れば場所の何れを問はず、彼我
 同数の日支軍隊が交戦し、あは日本兵の勝利期
 して待つ可きあり、余の西南の役も忠實ある軍

隊が當時の尙ほ訓練の日淺かりしも拘らず
 携帶の武器こそ不充分ありしあれ勇敢容易
 當るべからざる所の謀叛兵も立向ひ面も振す
 闘せしを實際も目撃したり況んや近年に至り
 ての日本將校の一人が發明せし精巧なる村田
 銃あるも於てをや云々
 ○平壤の陥落及び北洋艦隊の敗北とが倫敦
 又聞へたる後ちタイムズの日く、日本の既
 界の識者をして以後東洋の一新國と認めざ
 るべからざることを曉らしむるも充分なる働

らきを爲したり平壤の陸戦と鴨綠江の海戦の
 萬國諸人の目を覺まし故らも無頓着なるもの
 か若くは強て瞑目するもの、外に此新國が列
 國の間一席を得たること及び其發言の列國
 の聴かざる能はざる所のものたるを信ぜしめ
 たり、ヴォオ、ウレミヤ(露國の半官報)の云ふ如く
 露國の尙ほ太平洋の沿岸に於て安全ある一港
 を得んと欲して止まず是れ日英兩國の共み黙
 視する能はざる所あれば追て今度の事件も諸
 外國が干涉する場合も至れば兩國の相提携

するの位置を取ることあるべし云々
 ○倫敦發の電報ありとて桑港シロニクル新聞
 又掲げたる所を見るよ曰く
 スタンザードの日本の司令長官の作戦方法
 を大いよ稱賛し支那が再び朝鮮に於て舊來
 の地位を回復することの甚だ困難にして殆
 んど望みあしと論ぜり又同新聞の説よ據れ
 日本との戦争準備の整頓せる有様の支那と
 の實よ雲泥の相違あり支那の舉動の殆んど
 見戲よ等し云々

タイムスの曰く鴨綠江海戦の結果よして吾
 々の推察する所と全く異なるよ非ざれば該
 地よ上陸したる支那兵の誠よ進退維谷の
 窮境よ陥りたるものと云はざるを得ず支那
 の海軍將官の陸軍將官と同じく兵法の初歩
 をも辨へずして戰略を定むる者の如し其戰
 略の拙劣よして而もこれを實行するよ手間
 取たる爲め彼等の既よ失ひたる所を今後回
 復することの果して出來るや否や甚だ疑ふ
 べし支那の艦隊司令長官の其因循不活潑さ

るが爲め朝鮮を既日本の手渡した
 るのみか李鴻章部下の兵の中
 たる隊を盡く死地に陥れたり云々
 ○米國海軍少將ミード氏の大
 を賞美して曰く東洋に於る争闘に於て日本
 人の勝利の色あるが如し日本人の最
 なる人民にして常に進取をことし
 新の文明の度達せり支那人の餘
 晩れたり彼等の自家の力を知らず
 國富み力強し然かれども自國の富源を發し

て利用すること知らず他人のイザ知らず余
 の支那が己れを覺知せざるを悦ぶあり
 如何とあれ彼其四億の民衆を以つて累の
 大なるものを西洋諸國に及ぼすこと無きを
 保せざれば余の日本の海軍勝利を聞いて
 驚かず日本の過去廿年の間戦術を研究し來た
 りたり支那の唯簡單な船艦を造り來たりし
 み試ろみ見るべし日本の四十年間如何か
 る進歩を爲せしや實に驚嘆の外かあるあり左
 しも強大なる力らを持あがら支那の運命の敵

の爲め又打挫がるゝ極まりたり支那人の摸倣の才又富みて智力ありと雖も彼等の艦の寶の持ち腐れあり彼等の道具の用法を知らざる職人の如し今回の海戦大勝利に於て一方の人種の訓練と堅忍不拔の氣象と他の一方の人種の富と人数と又向つて効力を示したるあり云々
 ○倫敦エコノミストは曰く日本の熱心同國に對して好意を表するものすら更も待設けざりし程の大勝利を得たるものと云ふべし親しく

同國もありて其陸海軍の將校下士卒に至るまで忠勇の心又富み又訓練の行届きたるを實見したるもの皆明言して曰く此陸海の兵を以てすれば何時支那と戦端を開くも勝利疑ひなしと左れと是等の人々とても今度の如く大勝利を得べしとの思はざりしからん實に日本の宣戦布告より僅か二箇月にして全く清軍を追拂ひ朝鮮半島又其足蹟を殘さしめざるが海上の北洋艦隊を破壊して再び用ふることも能はざるに至らしめたり尤も清の海陸軍未だ全

く滅亡したるもあらず又其國の大なる之を恢復するの力も從つて大あれども兎も角も第一戦も於て日本の勝利の大なるの争ふべからざる事實あり云々

○日本軍が旅順口を占領したるを英國の諸新聞紙の擧つて之を稱揚せり即ちタイムスは曰く若しも日本が支那の傲慢無禮を以て未だ撃据られたるものも非ずと主張せんか孰れの西洋國も事局に關する知識も於て日本の立勝れることを論争し能はず之を論争し得るものなり

只支那のみ而して支那が事の形勢を了解せることを證明し能ふ唯一の手段は日本に向つて明々地々和を請ふに在るのみ而して支那の方よ於て斯る運動のあきま於ては旅順口が没落したればとて以て中立諸國が是まで維持し來りし中立の姿勢を變ずるの新理由若くは新機會と爲すべからず云々又スタンダード新聞の曰く之を愛國心と訴ふるも常識を徴するも支那政府の日本へ對し苟くも亡國を意味するより少なき讓與されば如何ある讓與も爲す

べき事至當として目下の機會の出來るだけ充
 分ある條件の命令を明々地日本に向つて請
 ふべき機會あり云々
 ○旅順口占領の當時歐洲諸國より達したる電
 報に依れば日本軍が旅順の險要を占領したる
 一事の歐洲諸國の人心に非常なる感覺を興へ
 此日本軍の大勝利の一般の驚歎稱賛を招きた
 り云々又日本既強大國の列入り其陸軍
 海軍の戦學上最強國と同等のものたること
 諸國の既承認する所あり云々

○獨逸士官某の寄書ありとて英國の雜誌に
 ウ、レヴニス、の紙上に掲げて曰く日本人民の實
 驚くべき人民にして其進歩の實著るしき
 ものあり彼等の既已我々と肩を並べんと
 するに至れり彼等の物事と倦厭屈託する事
 質素として極めて組織の術と巧みあり而して
 亞鬼羅刹の膽力と天運と安んずる決心とを兼
 有せり彼等の我々獨逸人似たる鞏固の徳性
 と佛人固有たる輕敏の資性とを具へたり余
 の豫言者の業を執らんとする者非ずと雖も

若しも是非とも豫言せざるべからずと迫られ
 ば余の日本の亞細亞に於る前途の猶ほ英國
 人種が亞米利加及び濠洲に於るが如しと斷言
 して大いよ余の名望を高ふするの日あるべし
 と期する者あり云々
 ○佛國新聞シュルナル、マルシオンツイル曰く日本
 の文明の近來大いよ發達し其政治、軍事、司法、行
 政等の組織の都て模範を佛蘭西に取れ或點に
 於ての却て之を改良を加へたるものさへあり
 殊に教育制度の如き最も著るしく發達し學

校法の未だ行はれざる時よ於る佛國に比すれ
 ば數等の上よ位するものと云ふべし我國人の
 能く知る如く日本の自國の有名なる人物を我
 國に派遣して我文學、理學、美術、軍事等を研究せ
 しむると同時に又佛國より政治家、學者、法律家
 等を招聘して夫々之を使用し、あり例へば
 ポアツナード氏の如き日本政府の顧問とあ
 りて其法典を編制するよ與かりて大功ありし
 人あり而して我國と日本との交際の常よ最も
 親密にして此上よ望む所の者あるを見ず又日

本人の鋭敏活潑にして能く働らき能く艱難も耐へ勇敢も正直も器用に風流も勉勵もして才智も富み水夫としても兵士としても申分なき人民あり之を要するも日本人の氣象と佛國人の氣象との大いなる相似たる所あるが故も人或ひの日本人を稱して亞細亞洲の佛人ありと云ふ者あるも決して無稽の言なりあらざるあり然るも支那の日本より比して全く趣きを異にし五千年間更も進歩したること亦く苟くも文明の事と云へば徹頭徹尾反對するの常あり加之

あらず支那の佛蘭亞と對して殊も反敵の實を表はし現も彼の海陸軍の夥多の日耳曼士官を使用しツ、あり以上述る如き次第あれば單に感情の點より云ふとき我々佛國人の是非とも支那を擯けて日本より左袒せざるを得ず又た此度日本が支那と對して戦ひを開きたる目的の朝鮮をして支那の制御を離れて獨立せしむるも在りとの事實の我々をして日本も同情を表せしむるの大原因たるべし兎も角も人口僅かよ四千万の小國が四億五千万の臣民を有

する大國と戰ふて之を撃破るを見てハ勝者の
 勇氣熟練を稱賛せざることを得んや蓋し此度
 日本が勝利を得たるハ全く山縣大將及び其他
 將校の功妙ある作戰計畫と之を實地に行ひた
 る兵士の勇氣熟練と由れること疑ひあるべ
 からず云々
 此外もまた澤山侈坐います餘り長くあり
 ますから先づ此位にして置ませう、ソコで我大
 日本帝國が斯の如き大名譽を博したる所以の
 ものハ即ち恐れ多くも 敬聖文武ある我天

皇陛下の侈威徳と忠實勇武ある陸海軍其人々
 の賜と謝せずんば成りません(ヒヤ)而して
 之を謝するも當つて亦我々も之を報酬する所が
 無くてハ成りませんが、夫ハ又別問題として吾
 人共も先此大名譽を博したるの幸福を祝し且
 心頭も記して千古の紀念も供さなければ成り
 ません、即ち道人が此處も外國新聞を引合も出
 しましたのも、矢張り之をして千載の紀念たら
 しめんが爲で御座います御退屈様(拍手大喝采)
 ○大日本と朝鮮

百
今度の日清戦争の原因は何かと云ふは已に諸君も御承知の通り朝鮮は東學黨と云ふ暴徒が起つて、朝鮮政府の自ら之を鎮壓するの力なくツイ隣國のちやんく坊主を頼んだのが起源りで、又ちやんく坊主めも應援を頼まれたら頼まれたやうな豫て日本との約束もあれば充分又其手續きを盡せば宜いのみ、オイソレと早呑込又飛出すのみならず、奴子さんのズットお天狗もあつて、我が屬邦を援助るとか是は古來より中華の慣例だとか、素敵滅法界もあは熱を吹

百一
て大日本帝國の体面へ泥を塗るやうな無禮至極な振舞を仕出たから日本は其無禮を膺懲さんが爲め兵を出し、遂にちやんく坊主をして藥罐の湯煮蛸と一般たらしめた譯で御座います、が實はちやんく坊主は馬鹿どもウソツクとも間拔とも漂碌玉とも何とも彼とも云ひやうのさし輩で御座います(ヒヤ)朝鮮を以て中華の屬邦とい何處からどう割出したのか、何處をどう押して出て來た寐言だか知りませんが、元來朝鮮の獨立國たる事、我大日本帝

國が認めて之を各國に紹介したのみならず同國と日本との交際の随分古い話して、ちやんく國の屬邦あど、ん思ひも奇らさい事で御座います(ヒヤク)夫又就て或人が取調べた日韓交渉起源と云ふものが御座いますから、諸君の御参考まで一寸朗讀して御聴又達しませう(謹聴)

日韓交渉起源

我が大日本帝國と朝鮮國との交際の神武天皇即位紀元六百二十八年崇神天皇の御宇六

十五年戊子即ち西曆耶蘇紀元前三十二年より起り、二千二百三年後奈良天皇の天文十二年癸卯、西曆千五百四十三年齋浦に在りし日本館を釜山浦に移し二千二百九年後奈良天皇の天文十八年己酉、西曆千五百四十九年兵火の後新釜山に日本館を築く世の之を己酉條約と云ひ、通商貿易是より大い且面目を改め、漸次繁盛を加ふるに至れり、二千二百七十八年後水尾天皇の元和四年戊午、西曆千六百十八年始めて釜山を我が居留地と稱す、二千

三百三十二年靈元天皇の寛文十二年壬子西
 曆千六百七十二年日本館を釜山より草梁
 移す、是れ今日釜山港と名くる所あり、夫れ此
 の如く我國と朝鮮との交通の往古より開け
 しよも拘はらず二百餘年來空しく疎遠の間
 又經過せし、當時我が國が朝鮮交際の事を
 舉て、専ら舊對馬藩主宗家又屬托したるを以
 て、宗家配下の外の自由又朝鮮又來往する能
 はざりし、因るものあり、然る又明治維新以
 降歐米諸國との交通年々日々頻繁を加ふる

又反し、隣國朝鮮との交誼此の如く疎遠ある
 り、彼我兩國の大い又不利とする所ありとて
 彼是商議の上、遂に明治九年二月廿六日又至
 り、日韓兩國の間又修好條規を締結し、爾來益
 々親睦を重ね、朝鮮開化の誘導者として將た
 朝鮮利益の保護者として、最も尊敬せらるゝ
 又至りしあり云々
 先づ斯様次第で伊座います(ヒヤ)と云ッ
 て何れ日本が朝鮮と古く交際をして居たから
 とて、夫が爲め又是ほどの利益があるの何れ程

の徳があるのと云ふ譯でも何でも侈座いませ
 んが彼のちやんく坊主めが餘り朝鮮を馬鹿
 むするが故に日本固有の大和魂を以て朝鮮
 を助け猶ほ之を助けると同時ちやんく坊
 主の鼻ッ柱をペシーリと捻折らざるを得ざる
 事立至ったので侈座います(ヒヤ〜)尤も是
 等の事の今更物珍らし氣又饒舌り立すとも諸
 君の遠くの昔しよ侈承知で侈座いませうが道
 人の夫是又拘らず只日本と朝鮮との關係の此
 の如きであると云ふだけの事を侈報道申した

ので侈座います(拍手大喝采)

○戦争の錦繪を見て感あり併せて
 畫工先生に注意を促す

諸君道人の常又口を開けバ高慢知奇事も饒
 舌くり筆を執れば随分利口振た事も書立ます
 けれども其實腹の中を覗ひて見た日よの誠又
 早やお恥かしい譯柄で(ノウ〜)問口も無けれ
 ば奥行もあし早く云ッて見れば先づ文學界の
 孫店か將た床店かど云ふ位の男で御座います
 (ウ〜)猿が故又鹿るが故に錦繪を見て感あ

りあど、事大業も觸れ出して、其感たるや、頼
 珍感の感やら、陳紛感の感やら、自分よでさへ感
 定が附あいな位ですから、人様よの猶更分らあ
 又相違あいなウウウ、況てや今日の文明界も於
 て、東洋の技藝とか日本の美術とか云って、大層
 内外國人も持囃されッ、ある畫工先生も向ッ
 て、大膽も向ふ見ずも無鉄砲も、盲蛇も
 注意を促すの忠告するのと云ッても、元々繪畫
 の奥儀を呑込で居る譯でも何でも御座いませ
 ぬ、ウウウ、ヒヤウウウ、例へば茲も一疋の虎が描

てある、夫も大きいからハ、ア虎だあと思ふや
 うあもの、若し是が小さく描てあつたからハ
 ハ、ア此奴の猫だあと思ふかも知れません、ヒ
 ヤウウ、謹聴、と云つたやうあ譯ですから此
 様も無茶苦茶眼で見られた日、ア、何様も名
 畫でも美術品でも實も迷惑千萬あもので御座
 いませう、ヒヤウウウ、故も其の云ふ所或はハ、咄表
 子もあいな見當違ひをして居るかも知れません
 否、咄表子もあいな見當違ひも相違御座います
 まいが、併し岡目八目と云ふ事もあり、逢た子も

教おしられては淺瀬あさせを渡わたると云いふ事ことも御座ございますか
 ら、若もしも其その云いふ處ところもして幾いく分ぶんか八目はちもくの功こう能のうあ
 り、又また淺瀬あさせらしい處ところがありましたから御探ごたん
 用よう下くださるべく、若もし又また丸まるッ切きりトンチンカンで
 ありましたから、決けつして御遠慮ごえんりょも及およびませ
 んから、何なにを素人しやうじんの癖くせも生意氣せいきを吐露ねかし居ゐると
 眼鏡めがね越こえ白眼はくがんで鼻はなの先さきでフンと一いっッお笑わらひ下くだ
 されても差支さしつかへないの御座ございます(ヒヤ〜)
 イヤ、追おうか〜と前まへ口上こうじやうが長ながくありましたか
 扱おて是これから本ほん文ぶんも取掛とつて兎とも角かく諸君しよくんの涉清せつせい

聽きを煩わづらはす事ことも致いたしませう(謹聽〜)其處そこで道みち
 人じんが畫工えさこう先生せんせいも向むかつて涉注せつちゆ意いを願ねがひ度たびと云いふ
 の、他ほかの事ことでも涉せつ坐ざいませんが、彼かの日清戰争にっしんせんそう
 の錦繪にしきゑも餘あまり間違まちがひが多過おほすぎると云いふ一件けんで涉
 坐ざいます(ヒヤ〜)諸君しよくんも涉承知せつじやうちの通とり我が大
 日本帝國にっぽんていこくの軍隊ぐんたいが例れいの豚ぶたの化物ばくぶつ然ぜんたるちやん
 く坊主ぼくしゆの征伐せいぱつも着手ちやくしゆせし以來いらい、我兵わがへいの精銳せいゑいあ
 る實じつも連戰連勝れんせんれんしょう戦いくさへ必かならず勝攻かちせきれば必かならず
 取とると云いふ、前代ぜんだい未曾有みそこの大勝利だいしやうりの目出度めでたいと申まし
 て宜よろいやら、有難ありがたいと云いつて宜よろいやら、只我々ただわれわれの大

日本帝國萬々歳を連呼連唱するの外に、傍座い
 ません(ヒヤ)くく(而して其大勝利を祝
 し、大日本帝國萬々歳を連呼連唱すると同時
 逸早くも都下の繪紙屋もピラくするに、即
 ち日清戦争の有様を模寫したるものにて、彼
 ちやんく坊主めが日本兵士の爲に、或ひに首
 をチヨン切られ、或ひに頭を撲り付られ、或ひに
 撃殺され、或ひに横ッ腹を突通さるゝ等、我兵の
 勇奮あるを眼の前に見るが如きの心地して、如
 何よも愉快々々で傍座います(ヒヤ)く(其處で

斯様も我々をして愉快あらしむるよも拘らず
 又其種類の幾百千あるよも拘らず、其中又就て
 成ほど是の能く出来て居る是の感服だと思は
 れるの、十中の一二又過すして其他の惜い哉
 概ね意匠も乏しき、勿論、猶ほちやん坊主
 の軍服が出鱈目さの、是のマア無理もあいな事
 と大目も見れた處で、責て、現在日本將校下士卒
 の軍服軍帽だけでも似寄たものを書いて貰ひ度
 と思へど、是とても皆無開放体の無茶苦茶よ
 閉口致します(ヒヤ)く今その二三記憶して居

る處を云ツて見ませうあらば、大禮服を着し勳章をピラ／＼させながら部下の兵卒を指揮して居るのまだしもの事、甚だしきに至つては陸軍の將校が海軍の服を着し、海軍の將校が陸軍の帽子を被つて居る、さうかと思ふと樂隊の服を着た砲兵もあれば長靴を穿た歩兵もあり、或ひは軍艦の淀泊して居る傍をザブ／＼渡つて居る兵士もあれば、激波怒濤の處を悠々として歩いて居る馬あり、イヤ／＼ハヤ亂暴極まる出鱈目の有様、彼の西南の役の當時西郷さんが星の

中又威張つて居た繪柄よりも、尙ほ一層甚だしいやうな思ひれさす(ヒヤ／＼)尤も之を書く人の量見で、ホンの子供の玩具だから何でも宜い、只赤い物や青い物が附着て奇麗でさへあれば宜いと思つての事、かゝ存じませんが、道人の大い又之も反對です、如何様錦繪あるもの、只ホンの小兒輩の目を喜ばしめ手も弄ばしむるの玩具も過ぎないといふもの、小兒輩の弄ぶものあればこそ、猶更注意して貰ひ度と思ふので御座います(ヒヤ／＼)何とあれば小兒の素より見

聞狭く、見る物聞くもの毎々漸々と知識を増む
 のあれば、其大切なる智識發達の資料は此様
 大間違ひの物を授けられて、後來教育上の妨
 害も成らうとも決して益する處のあからで
 御座います(ヒヤ)且つ是が近來流行の駄小
 説の如く、一寸書肆の手を経て二度目より大
 転がり、三度目より屑屋の籠の中へ這入ると云
 ふやうな、今日あつて明日あつた物あらば兎も角
 も、已に吾孀錦繪と云へる有名なる肩書のある
 のみならず、今度の戦争の繪の如き、何れも帝

國の名譽紀念として之を永遠に保存して置く
 人も澤山あるで御座いませう(ヒヤ)猶ほ此
 錦繪の外國人あつても最も好んで之を購ひ或ひ
 は本國の知己朋友に贈る等の事も御座います
 から、之を大いすれば其大間違ひの一國の体面
 もも關する大切なる事柄と云ふも、強ち針小棒大
 の言草で、無からうと思ひます(ヒヤ)試み
 んと思ひ給ひ、彼の寫眞師が最初誤つて日本人を
 逆に寫し、其左衽に心附ずして之を自慢顔に販
 賣し、其當時物珍らし氣に之を買求めたる外國

人の今に至るまで之を手本として模寫するが
 故、已に二十餘年の星霜を経たるの今日、在
 つても外國より送り來る煙草の看板あやの概
 ね左衽の婦人を見るでの御座いませんか(ヒヤ
 〃〃〃)然れば道人の畫工諸君も向つて
 斯の如き無茶苦茶を畫いて平氣の平左の不都
 合無からん事を希望すると同時、又これを媒
 介するの繪草紙屋も向つても、只義經辨慶の無
 茶繪否あ武者繪と同一視して、何が何でも一時
 其場を誤茶魔化して鏡箱も重味さへ付れば宜

と云ふやうな無敵流を止して、少しの畫工の撰
 定方より意を用ゐられん事を併せて希望致し
 ます(拍手大喝采)

○一致力の必要

諸君、頭を擧て彼の富士山を見給へ、實は巍峩と
 して高く且つ大なるもので、御座いませんか
 (ヒヤ)諸君、頭を垂て彼の琵琶湖を見給へ、實
 は渺茫として遙か且つ廣いもので、御座い
 ませんか(ヒヤ)一寸考へると如何してマア
 彼様か、高いであらうか、どう云ふ譯で彼の様

り、即ち我々が日々歩行する處の水と少しも
 變つた事のないので、滂坐いす(ヒヤ)我々が
 が日々歩行する處の土砂、我々が日々歩行する
 處の水ですら、能く集合一致するときは、斯
 す(ヒヤ)琵琶湖だからとて之を酌取て見れ
 ば、即ち我々が日々歩行する處の水と少しも
 變つた事のないので、滂坐いす(ヒヤ)我々が
 が日々歩行する處の土砂、我々が日々歩行する
 處の水ですら、能く集合一致するときは、斯

の如き奇觀を呈し斯の如く美景を顯はすもの
 でありますからして、況して靈妙ある能力を有
 し機敏ある智識を持て居る人間が、能く協同一
 致すれば如何なる出來得べからざる事にあ
 又之を反して、縦ひ千万人が頭を揃へるとも、其
 心が揃はあいで各自の氣任せ又事をするとさ
 り、何一ツとして纏つた事の出來ません(ヒヤ)と
 早い話しが、今度の日清の戦争を、滂覽じろ、日
 本の軍隊の素敵滅法界、又強く向ふ處、天下
 敵あしと云ふ勢ひで、已に彼が金城と誇り、鉄壁と

守ッて居た要樞の地を悉く略取し進んで奉天
 府を陥落し北京を占領すると云ふまで又勇敢
 なるも引替へ、常々東洋の大國だとか四百餘州
 が何だとか云ッて自分免許の唯我獨尊を極め
 込で居た甲斐もあく、其弱さ加減と云ッたら誠
 又早や哀れ果敢なき有様で、丸で赤ん坊の腕を
 撚繰やうあもので侈坐います(ヒヤ〜〜)
 けれども又能く〜考へて見るとちやん〜
 坊主だからとて強ちさう馬鹿にするほどの意
 久地あしでも無いので侈坐います(ノウ〜)イ

ヤ決して(ノウ〜)でいさい、其証據より随分敵
 を防ぐも足るべき堅固ある砲壘を築き、敵と戦
 ふより充分ある程の兵器も備へ、サア来いと逃
 腰あがらも持構へて、さうして戦ふ毎も何千人
 とか何万人とか夥多しき死傷のある處を見れ
 ば、万更最初から負る積りで取掛ッて居るので
 り無からうと思ひます(ヒヤ〜)素より負る積
 りで戦争をする奴も無いもので、必らず勝積り
 でのありませうけれども、併しイッラ兵隊の頭
 數が何百万人あつても、彼よりの肝心あ一致力ど

云ふものが無く、臆病な奴のサッサと逃る向
 ふ見ずの奴の素ツ方向ひて鉄砲を撃て居る、左
 赤がら猿芝居か犬の手踊りでも見るやうな鹽
 梅敷きの處へ持て来て、日本の軍隊の取分て紀
 律正しく將校の方々の軍略も富み下士卒の入
 々の所謂大和魂と云ふ一致力も富で居るから
 して、夫でちやんく坊主の一も二もあく滅茶
 くも負る、日本の連戦連勝と云ふ大反對の結
 果を見るやうな事も立至つたので御座います
 (ヒヤ〜)故に戦争も限らず何事をするも就て

も、此一致力と云ふものが無かつたら、一事
 一業たりども決して成就する事出来ません
 其中でも實業家も於て最も此一致力が
 必要で御座います、どうせ饒舌り序です、此
 事も一寸お話しを致しませう(謹聴〜)先づ一
 商家を右の戦場も譬へて見ますると主人公の
 司令官、細君息子殿の將校、雇人の皆を兵卒と云
 つたやうなもので御座いますから、若しも主人
 公の軍略が其當を得ぬとか乃至また細君息子
 殿及び雇人等が主人公の軍令も背くとか、即ち

各自の量見を以て各自の事を爲し、主人の熱心
 又營業上の事又奔走して居るのよ、細君の芝居
 又行て張子の首又涙をこぼして居る、息子の一
 生懸命又算盤と首ッ引をして居るのよ、親父の
 朝から酒を飲で太平樂を極て居ると云ふやう
 亦不規則でハ恰かも權兵衛が種を蒔く片ッ端
 から鴉がホヂッルと一般で、いつまで経ても商
 業界の強敵を擒よして弗國万歳を唱へる事ハ
 出来ぬのみならず、自然番頭ハ帳場又居眠りを
 する、丁稚小僧ハお三どんと掴み合をする、イヤ

ハヤ塚口のあい乱脈又立至り取も直さず味方
 又して味方を滅亡やうな事が出来するので御
 座います(ヒヤ〜)故又一家の主人たる者の常
 又一致力を製造する事又注意し、又彼の將校の
 方々が自ら彈丸雨注の中又先んじて兵士を指
 揮せらるゝが如く、何でも自分からして働いて
 見せ無ければ、部下の雇人が服従して働くもの
 でハ御座いません(ヒヤ〜)例へハ朝丁稚小僧
 を起す又しても、主人の夜具の中から僅か又天
 窓だけ出して、パツ〜リ〜煙草を吸ひながら

コヲ定吉ヤー……長松——起きあいかと呼び
 起せば、定吉も長松もへいと返辞のするもの、
 中々チヨツツラ夜具の中から潜り出さあ、夫
 からヤット起き出たかと思ふと、贖鼻禪の裏表
 を調べるの、凡そ一時間も掛るやう次第で
 侈坐いませが(ヒヤ)其處を主人が雇人より
 真ッ先又跳起て、サア定吉も起ろ長松も起さろ
 誰も起さろ彼も起さろと殿しき号令を下しま
 すれば中々どうして悠々閑々と贖鼻禪の裏表
 などを取調べて居る譯も行さません直又目

を摩りくありとも飛出して来て働かねば
 らぬやうなもので侈坐いませから、總て一家の
 盛衰も商業の盛不盛も、皆主人公其人の采配
 の振り方一ツ又あるので侈坐いませ、餘り長く
 成りませから先づ此邊でお仕舞と致しませう
 (拍手大喝采)

○ちやんくの唄

扱て諸君、道人も餘ほどもう饒舌り草臥たし諸
 君も最早欠仲の出る頃で侈坐いませから、演説
 は先づ此位又して置いて今度の歌を唄ひませう

(ヒヤ〜)演説の席で歌を唄ふて丸で味噌も糞もと云ふ傾きがあるが、どうせ道人の演説の鼻謠を唄ふのも同じやうなもので、殊もちやん〜退治のおツ始まつて以來の種々の謠が流行して、まだ碌々舌の廻らぬ小兒に至るまで、支那のちやん〜坊主のヨツポド弱いものとか、日本の兵隊さんのヨツポド強いものとか云ツて謠ふて居ます(ヒヤ〜)尤も謠も限らず此節の何れも就てもちやん〜坊主ちやん〜坊主とさへ云へば、誠と腹の中が清々して愉快か

やうな心持が致しますから、道人が此處まで披露及ぶ歌も矢張り其ちやん〜坊主の一件で、ちやん〜盡しいろは頭附かぞへ唄と云ふので、坐います(ヒヤ〜)道人の作る事はどうもか斯くか遣りましても聲を出して唄ふ事に至つては頗る閉口の方で、坐いますから、其處の處の諸君も於て宜しく美聲を以てお謠ひ直し下されん事を偏り希望致します(ヒヤ〜)

○ちやん〜盡しいろは頭附數へ唄

○いの字とせー如何も強情張るとても態を

見ろ、最早や囊の鼠あり、コノちやんく坊主

○ろの字とせー 論より証據の清國へ、オンくと進み入りたる我が手並、コノちやんく坊主

○はの字とせー 恥も知らぬバ外聞も、何も彼も上の空ある鉄面皮、コノちやんく坊主

○よの字とせー 人非人どの此事ぞ、ことく盗賊七分の豚尾兵、コノちやんく坊主
○ほの字とせー 奉天府までも攻め取られ、ま

だ平氣、少しも感ぜぬ無神經、コノちやんく坊主

○への字とせー 屁問をはたらき支那政府、コノちやんく坊主

○どの字とせー どんだ事をバ仕出かして、李鴻章、今更後悔臍をかむ、コノちやんく坊主

○ちの字とせー 力も無ければ智慧もあし、穀つぶし、是が世よ云ふ娑婆塞び、コノちやん

坊主

○りの字とせー 理も非も分らず豚尾めが無敵流、日本に手向ふめくら蛇、コノちやんく坊主

○ぬの字とせー 盗みするやら強姦や、各自よ言語同斷支那の兵、コノちやんく坊主

○るの字とせー 類を集めた馬鹿と馬鹿、馬鹿くし、その又大將の意句地あし、コノちやんく坊主

○をの字とせー 男の氣象の更もあく、メツく

と軍よ出るよも泣き別れ、コノちやんく坊主

○わの字とせー 別れくよ蜘蛛の子の、大風よ散るが如くよ潰走す、コノちやんく坊主

○かの字とせー かあはあいとて軍艦も、逃こみて、さッぱり出て來ぬ卑怯もの、コノちやんく坊主

○よの字とせー よこしま非道の野蠻國、未開人、今度の懲りたか弱つたか、コノちやんく坊主

○たの字とせー 大將も兵卒もてんくくみ、皆
あ無茶、慾張り一方で手も負へぬ、コノちや
んく坊主

○れの字とせー 禮儀作法のッリヤ昔し、今日
丸で畜生同様、コノちやんく坊主

○その字とせー 惣領の甚六季中堂、小氣味よ
し、傲慢無禮の罰あたり、コノちやんく坊
主

○つの字とせー ついしか勝たる例しあし、負
つつけ、是が本當のカラ負だ、コノちやんく

坊主

○ねの字とせー 寝かすも起すもモウ自由、斯
うあれば、四百餘州も日本領、コノちやんく

坊主

○あゝの字とせー 汝ぢ元來蛆虫か、その態の、夫
れども慈姑の化物か、コノちやんく坊主

○らの字とせー 乱暴極まる豚尾軍、無能無智
いつも同士討ち掴み合ひ、コノちやんく坊
主

○むの字とせー 無益の殺生とい知れど、まだ

億りず、敵對からよの塵し、コノちやんく坊主

○うの字とせー 蛆虫見たやうな兵卒が、ウヨくと出たかと思へば直ぐ逃る、コノちやんく坊主

○ぬの字とせー 居所つき留め攻め行ハ又しても何處へ逃たか影もあし、コノちやんく坊主

○の字とせー 望み通りよ膺懲し、撃潰し、愈々閉口の小氣味よさ、コノちやんく坊主

○おの字とせー おめす臆せず何處までも、日本兵、進んで退治るその勇氣、コノちやんく坊主

○くの字とせー 國も廣けりや人数も、随分よ多いが残らず木偶の坊、コノちやんく坊主

○やの字とせー 大和魂打ち揃ひ、勇しく、四百餘州を蹂躪す、コノちやんく坊主

○まの字とせー まるで芋虫同様よ、コロコロと戦争する度まけ續け、コノちやんく坊

主

○けの字とせー 見當違ひのヒヨロ武者が、ヒヨロくど、とんで火よ入る夏の虫、コノちやんく坊主

○ふの字とせー 不屈け至極の辯髪奴、ミシくと退治つくした腕を見よ、コノちやんく坊主

○この字とせー 小癩お振舞大馬鹿め、頓痴奇め、命知らずの向ふ見ず、コノちやんく坊主

○えの字とせー 閻魔も吃驚仰天す、左もあらん、豚尾の亡者の珠數つあき、コノちやん坊主

○ての字とせー 敵の百万ありとて、いか事、ひるまぬ氣象の日本兵、コノちやん坊主

○あの字とせー 旭輝ぐ日の丸の、その威光、致る處も敵のあし、コノちやんく坊主

○さの字とせー 先をあらそひ進み行く、我軍の、草も靡ける其威勢、コノちやんく坊主

○きの字とせー 規則も無ければ軍法も、あら
バこそ、皆ち出鱈目出放体、コノちやんく

坊主

○ゆの字とせー 愉快極まる勝軍、日の旗、照

し輝ぐ北京城、コノちやんく坊主

○めの字とせー 目立つ日本の勇々しさり、取

分て、諸外国でも皆ほめる、コノちやんく

坊主

○みの字とせー 見ても哀れる捕虜の兵、心ま

で、乞食又劣りしその不潔、コノちやんく

坊主

○しの字とせー 始末よかへかい野蠻人、夢我

夢中、命取られるも知らず、コノちやんく坊

主

○ゑの字とせー 英國露國へ仲裁を、手を合し

たのむ心を不便あり、コノちやんく坊主

○ひの字とせー 卑怯か大將弱い兵、恥さらし

末世末代笑ひ草、コノちやんく坊主

○もの字とせー 元を糺せば身から出た、錆あ

るぞ、是又懲たら慎しめよ、コノちやんく

坊主

○せの字とせー 攻め取る奉天北京城の上
の、最早謝罪の外なきし、コノちやんく 坊主

○すの字とせー 數十年來傲慢の大天狗、鼻を
ひしいだ心地よさ、コノちやんく 坊主
マーズこんあ事み誤魔化して此演説も目出度
しくと致します(ヒヤクハク拍手大喝采)

ちやんく滑稽演説終

明治廿八年一月十五日印刷
明治廿八年一月廿九日發行 定價八錢

淺草區須賀町十九番地

著作者

西 森 武 城

京橋區南傳馬町一丁目十四番地

發行者

西 村 富 次 郎

日本橋區新和泉町一番地

印刷者

瀧川 三代 太郎

京橋區南傳馬町一丁目十四番地

發兌

弘 文 館

日本橋區新和泉町一番地

印刷所

今古堂 活版所

版權所有

府下特別賣捌所

大傳馬町二丁目	室町三丁目	橋町一丁目	日本橋區若松町	日本橋區新大阪町	日本橋區通油町	馬喰町二丁目	橫山町三丁目	日本橋通三丁目	本石町二丁目	淺草區三好町
長島支店	杉本支店	松榮堂	柳原友吉店	鶴喜書店	藤岡屋	山口屋書店	辻岡屋書店	金櫻堂	上田屋書店	大川屋錠吉

府下特別賣捌所

南傳馬町二丁目	京橋區南紺屋町	京橋區大鋸町	橫山町一丁目	神田表神保町	日本橋區通四丁目	赤坂區表町一丁目	京橋區鎗屋町	京橋區弓町	小傳馬町三丁目	南傳馬町一丁目
目黒支店	薰志堂	青野友三郎	出雲寺	東京堂	東京堂	有則軒	北國組	松村孫吉	近江屋園吉	辻本九兵衛

鬼雄外史編述

繪本日清戰圖實記

定價拾貳錢
郵稅四錢

西森武城君編述

日清交戰實記

定價拾五錢
郵稅六錢

牛台山人鈴木純一郎君編述

日清戰爭軍人名譽忠死列傳

定價拾二錢
郵稅四錢

日清海陸將校一覽表

定價四錢
郵稅二錢

鈴木茂行君編圖

日清韓二國地圖

極細密圖彩色入
定價拾五錢
郵稅二錢

牛台山人鈴木純一郎君著作

清國征伐軍歌

定價五錢
郵稅二錢

骨皮道人著述

チヤンく征伐

定價八錢
郵稅四錢

骨皮道人校閱
鐵拳散吏著述

音曲チヤンく征伐

定價八錢
郵稅四錢

骨皮道人著述

チヤンく退治

定價八錢
郵稅四錢

骨皮道人著述

チヤンく征伐流行歌

定價八錢
郵稅四錢

五葉園松蔭翁校閱
五松園琴升大人編輯

狂詩
川柳
古今狂歌大全

定價貳拾錢
郵稅六錢

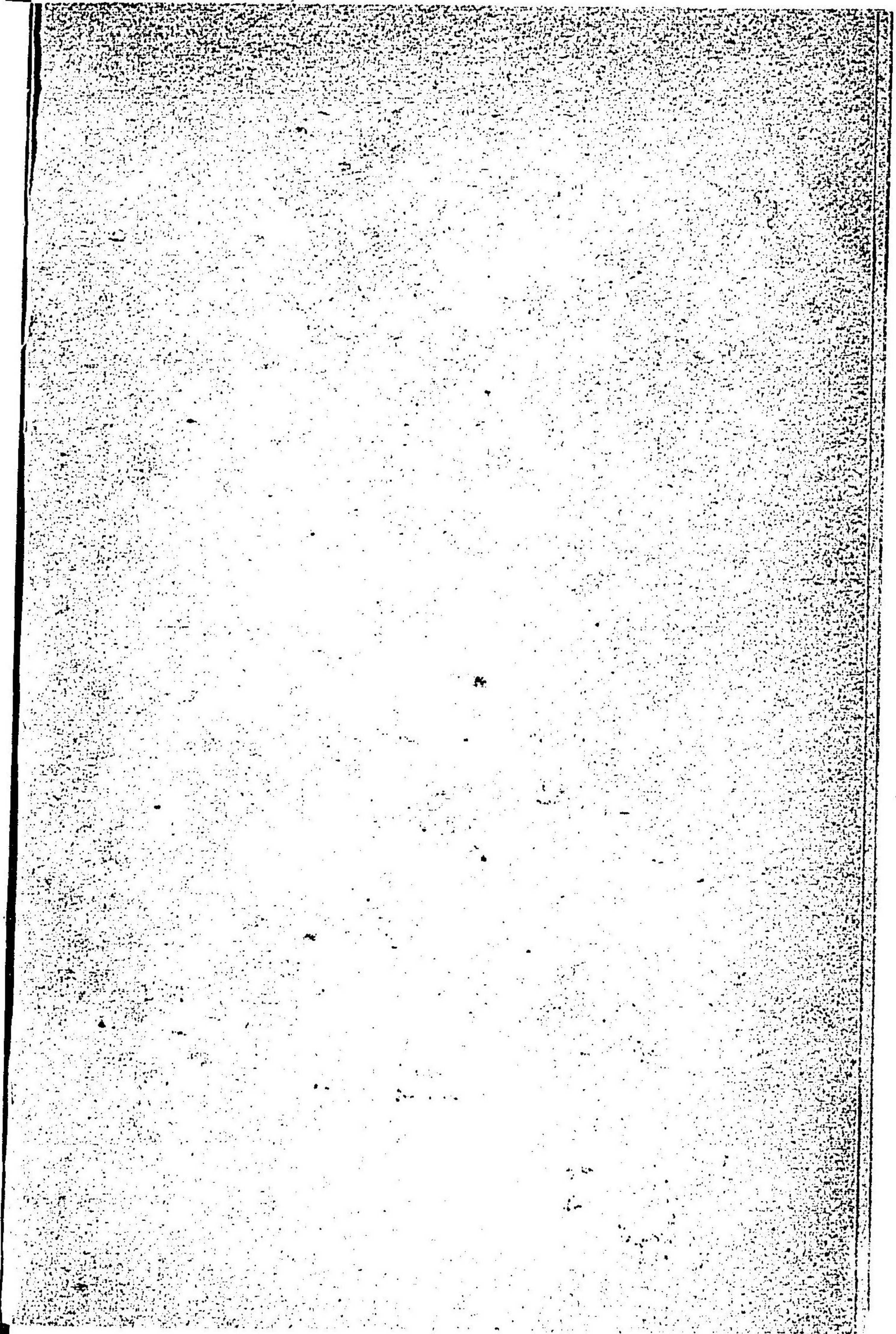
東京市京橋區南傳馬町一丁目拾四番地

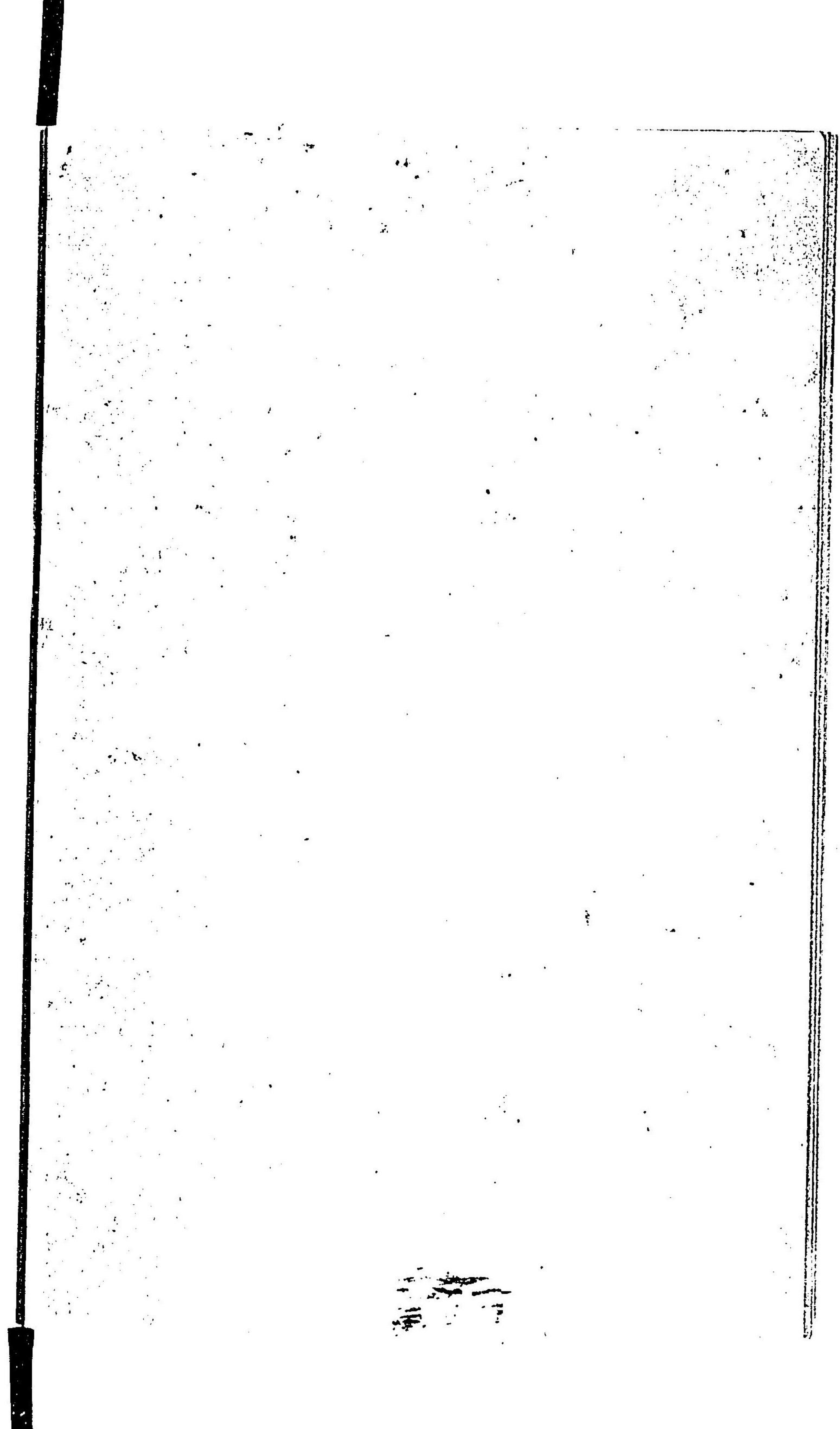
發行所

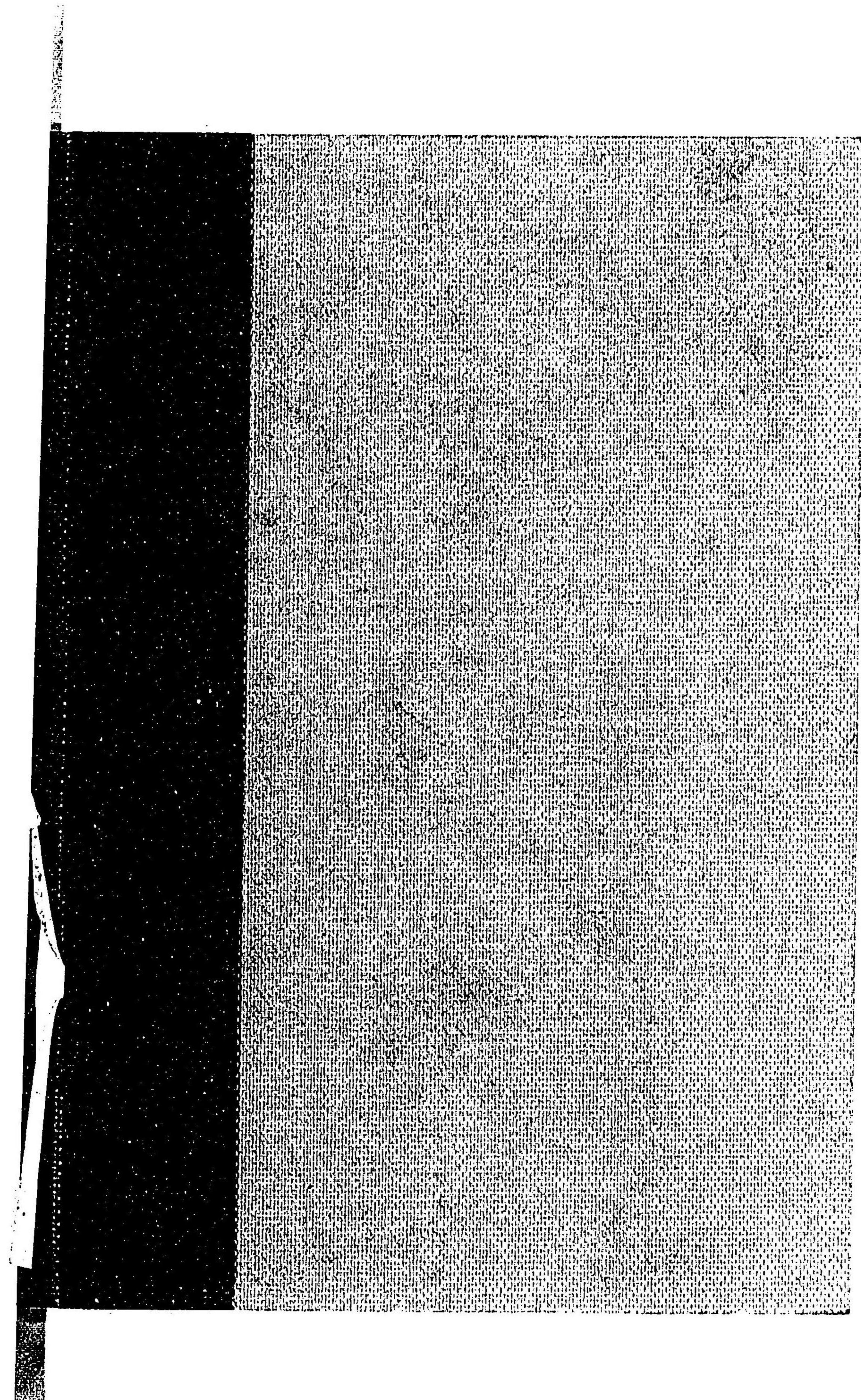
弘

文

館







特63

555

ちゃんちゃん
征伐滑稽演説

国立国会図書館

091650-000-2

特63-555

滑稽演説 (ちゃんちゃん征伐)

瘦々亭 骨皮道人 / 著

M28

DBO-0104

